

白雲洞遺稿卷の下

詩編

周防 南部 裕 君綽 著

齊藤 信行 編釈

1 元日草

元日草 がんにつそう

東風料峭入詩家

東風 とうふう 料峭 りょうしょう として詩家 しいか に入る

己見盆中吐小葩

すで 己に見る盆中 ぼんちゅう 小葩 しょうは を吐くを

三春吟詠從今始

さんしゅん さんしゅん 吟詠 ぎんえい 今より始じむ

先詠年頭第一花

先は年頭 ねんとう 第一の花

語意

東風 とうふう 東から吹いてくる風、春風。元日草 がんにつそう 盆栽の梅花か、福寿草か。料峭 りょうしょう 厳しいの意。三春 さんしゅん 春の三ヶ月、孟春、陰曆正月、仲春、陰

曆二月、季春、陰曆三月、三度の春。

通釈

東風といっても寒さは依然と厳しく詩人である私の家に吹いてくる、といっても盆栽の元日草は小さな花

びらを見せている、春の三ヶ月の始まりである、先ず年頭第一の花から詠むことにしよう。

2
初夏

初夏しよか

緑樹陰濃積雨霽

緑樹りよくじゆ 陰濃かげこま やかにして積雨せきう 霽はれ

紫藤花開午風微

紫藤しとう 花開ひらきて午風ごふう 微かすかなり

近來不讓華山老

近來きんらい 譲やらず華山老かざんろう

盡日閑眠掩小扉

盡日じんじつ 閑眠かんみん して小扉しょうひを掩おおう

語意

積雨せきう 降ふり続つづく雨。 霽はれる 晴はれる。 近來きんらい 近頃。 閑眠かんみん 静しずかに眠ねる。 盡日じんじつ 一日中。

通釈 降り続いた雨も晴れて木々の緑も映え、紫色の藤の花も開いて微かな昼の風がそよいでいる、華山老人は

この頃譲らない、終日戸を閉めて静かに眠る。

3 夏日即事

かじつ そくじ
夏日即事

軽雷殷在碧山陽

けいらい さかん へき さんよう
軽雷 殷に碧の山陽に在り

黯々陰雲暗一方

あんあん いんうん
黯々たる陰雲 暗き一方

風伯送將餘雨去

ふうはく ふうはく
風伯は送る將に餘雨 去るを、

濺吾小苑作微涼

そそ しょうえん びりよう な
吾に濺ぐ小苑 微涼を作す

語意

あんあん
黯々|| 暗い、薄暗い、奥深く明るくない。

ふうはく
風伯|| 風のおさ、風神。 しょうえん
小苑|| 小さな庭、小さな島。 せん
濺|| そそぐ、水をさつとふりかける。

通釈

ごろごろと雷が盛んに碧い山の陽に鳴る、暗い暗い曇天は暗くなる一方である。風の神は雨雲を速く送り

去っていく、私は小さな庭に水を注ぎ僅かながらの涼をとるであらう。

しゅうや
秋夜

しょうちく れんちゅう
湘竹の簾中 とうえい
灯影 こ
孤なり

一輪の涼月　りようげつ
庭梧に在り　ていご

夢は識らずに醒めて更方に幾ばくか

枕を繞る細虫の聲有や無しや

湘竹しょうちく 湘水野辺に産する竹。めぐらす
簾中れんちゆう 簾の中、転じて后妃の居宅大名、公家の正妻。
涼月りやうげつ 冴えた月
庭梧ていこ 庭の梧、琴

の材料。
繞じょうう＝めぐる。

湘竹の御簾の中の灯火がゆらゆらとするなかに、一輪の冴えた月は庭の梧の枝にかかり、夢は知らず

に醒めて夜明けはもうすぐだ、枕元に聞こえる細虫の声もぼんやりとしてあるかないのかわからない。

暮秋 ぼしゅう

ばんそう
晩窓枯れ坐す静かなること禪の如し

一炷しゆの沈檀ちんだん
一縷るの烟けむり

秋は前山に老いて紅葉
好し

紅霞こうか 襯しんを得て更に嬋娟せんえんたり

一炷いちしゅう〓香を焚く、
 一くゆりの香。沈檀ちんたん〓沈香と檀木、
 共に香木。一縷いちる〓一本の糸し。
 烟けむり〓煙り。老いて〓更け行く秋、
 晚秋。嬋娟せんえん

姿態の美しいさま、しなやかなさま。
紅霞こうか＝紅葉が紅の霞のように。
裾すそ＝肌着、ちかづく、たすける、施す。

秋は前の山から更けていく紅葉が美しい、紅葉が紅の霞のようにたすけて更にしなやかである。

6 江村二首

江村秋日二首
こうせんしゅうじつ

避塵近日學垂綸

塵を避けて近日垂綸を學ぶ
じん すいりん

雲水與吾似有因

雲水と吾と因有るに似たり
うんすい いん

湖鮮時節釣糸雨

湖の鮮かなる時節 釣糸の雨
あざや じせつ ちようし

自覺夫須能稱身

自覺す夫れ須らく能く身に稱う、
じかく そ すべか よ かな

語意

塵^{じん}＝世間の煩わしいこと。垂綸^{すいりん}＝魚釣り、釣り糸を垂れる。雲水^{うんすい}＝雲と水、禪宗の行脚僧。須^す＝求める、用いる待つ、すべからく、べし、しばし。

通釈

世間の煩わしいことを避けて近頃魚釣りを覚えた、行脚僧と私はすることが似ているようだ、湖水の温む頃釣り客の垂らす糸がまるで雨のようである。

沙上蓼花已開日

沙上の蓼花已に開く日
さじょう りようかすで

水中蓴菜欲肥時

水中の蓴菜じゅんさい肥えんと欲す時

江村一夜秋風起

江村かうそん一夜いちや秋風しゅうふう起る

三尺鱸魚上釣糸

三尺の鱸魚ろぎょ釣糸ちようしに上る

語釈

沙上さじょう|| 砂の上。蓼花りょうか|| 蓼たで、水辺に生え、葉は非常に辛い、たでの花。くるしみ、蓴菜じゅんさい|| ぬなわ池沼に自生し、新葉を食用とする。鱸魚ろぎょ

||

すずき、春夏海から河口に上る魚、幼魚をせいご、中をふっこと呼ぶ。

通釈

川辺の砂の上に蓼の花がもう開く頃、水中では蓴菜じゅんさいの肥立ちの時、川辺の村に一夜にして秋風が起る

頃、三尺もある鱸すずきが釣れる。

7 秋日

秋日 しゅうじつ

一雨驅残暑

一雨 残暑に驅ける か

秋色滿江城

秋色 江城に滿つ しゅうしよく こうじょう

得樹蟬聲急

樹を得て蟬聲 急なり せんせい

隨花蝶翼輕

花に隨い蝶翼 輕し ちようよく

好山看不厭

好山 看れども厭はず いと

蔓草刈還生

蔓草を刈れども還た生る ばんそう ま はえ

涼氣教人健

涼氣が人の健たるを教む りようき けん し

閑窓把筆耕

閑窓に筆を把りて耕す かんそう と たがや

語釈

秋色 秋の景色。江城 長江、揚子江沿いの村や街、川辺の村や街。閑窓 静かな部屋、寂しい窓辺。蔓草 蔓草、葛等の草。耕す 耕す。

耕、筆耕、書く。

通釈

残暑も一陣の雨が駆け抜けて、秋のさまが川辺の街に満ちている、樹木にとまる蟬の声も忙しく、花を渡る蝶の翼も軽やかである、好きな山を看ることは嫌いではない、蔓草刈ってもまた生えてくる涼、気が残暑に疲れた体を癒してくれる、静寂な窓辺で筆を把り書いている。

8 送玉乃公素之京師

玉乃たまの 公素こうそこれ京師きょうしに送る

嗟君歲晚趣天涯

嗟君ああ 歲晚さいばん 天涯てんがいに趣くおもむ

万里關河再訪師

万里ばんり 關河かんが 再び師とを訪う

因作東山數日惡

因とつて東山とうざん 數日に 惡にくむを作す

何堪叔度二年離

何んぞ堪しむえん叔度くど 二年 離るを

孤蓬雪滿登舟處

孤蓬こほう 雪滿ゆきみち舟ふねに登る處

曲浦風悲解纜時

曲浦きよくほ 風 悲しともすな 纜とを解く時

腸斷邊堤一株柳

腸はらわたは斷つ邊堤へんてい 一株いっしゆの柳

重攀去歲折殘枝

重きよさいねて去歲よじに攀りて殘枝ざんしを折らん

語釈

玉之公素たまのこうそ＝五竹の藩校での学友。嗟ああ「嗟さ、ああ」天涯てんがい＝天の果てと地の隅の意、極めて遠い所。晚歲ばんさい＝歳の暮れ。万里ばんり＝一万里、極めて

遠い距離。關河かんが＝関所や河。東山とうざん＝魯の城東の山、謝安が隠れた山。叔度しゅど＝わかい、僅かな間に。孤蓬こほう＝蓬で葺いた屋根の家、貧者や隠者、仙人の住

む家。曲浦きよくほ＝湾曲した港。纜いと＝綱で船を係留する邊堤へんてい「堤の辺り、ふち。一株いっしゆ＝一株の。攀よじろ＝攀登る。

通釈

ああ君は歳の暮れには極めて遠い所に行く、極めて遠い関所や河を超えて師を訪ねる、そして東方の情勢は悪いときに、どうして堪えようか僅かな間に二年も離れるとは、隠者の家舟に乗る所に雪が積もり、入り江の船着き場の纜ともしずなを解き船出する時風も悲しそうに吹く、断腸の思いで土手に立つ一株の柳、再び去年も攀よじった残枝を折ろう。

9 美人彈琴圖

びじん だんきん
美人彈琴の圖

有一美人欺仙娥

一人 美 有り仙娥を欺く
せんが あざむ

志高行潔妙絃歌

志 高く行い潔く絃歌 妙なり
げんか

調古不適時人耳

調べ古く時の人耳に適さず
しんじ

幽閨寂寞春秋過

幽閨 寂寞として春秋を過す
ゆうけい せきぼく

落花夕陽淡無味

落花 夕陽 淡くして味無し
らつか せきよう

又對溪山抱雲和

又た溪山に對して雲和を抱く
けいざん

唯有山水似千古

唯だ山水の千古に似る有り
せんこ

水自洋々山峨々

水 自ら洋々として山 峨々たり
がが

語釈

仙娥せんが 女の仙人。仙女。絃歌げんか 三弦、三味線、五弦琴、に合あわす歌。幽閨ゆうけい 奥深く物静かな夫人の部屋。寂寞せきぼく 寂しく、物静か。落花らつか

花ぶらが散る。夕陽せきよう 夕陽ゆつう 夕陽、夕暮れの太陽、夕日。溪山けいざん 奥深い山や溪谷。千古せんこ 太古、大昔、大變に古くより。洋々 広々と。峨々がが 山の峻しい。

通釈

一人の美人がいた女の仙人かと見まがうようだ、志高く行いも清潔で琴や歌にも秀で、古い調べで今の人には合わない、奥深く物静かな婦人の部屋で寂しく春秋を過ごしている、花は散り夕日は西になんとなく味けない、また山間やまあいの谷に雲が垂れ込み調和している、ただ山水のみは千古の色を湛え、その水は洋々と流れ山は峨々と聳え立つ。

10 山路即事

さんろ そくじ
山路即事

残日未収光尚明

さんじつ
残日未だ収らず光は尚を明らかなり

深林陰鬱路暝々

いんうつ
深林 陰鬱として路 暝々たり

草間已帯夜間氣

そうかん
草間 己に夜間の氣を帶る

點々山螢吹焰青

てんてん さんけい えんせい
點々と山螢 焰青を吹く

語釈

さんじつ
残日〓夕日、夕陽、夕暮れ。いんうつ
陰鬱〓鬱蒼と暗い、暝々〓はつきりと見えないさま。てんてん
點々〓小さな物が多数有る形容、滴のぼつぼつと落ちる

さま。さんけい
山螢〓山の螢 焰〓炎。

通釈 夕陽はまだ入らずまだ明るいが、森林は鬱蒼として暗くハッキリと良く見えない、草の間ではもう夜露がお

りて、点々と山螢が青い炎を吹いているように見える。

11 戲贈修鍊人

たわむ しゅうれんじん おく
戯れに修鍊人に贈る

聞君幾歲鍊仙丹

いくさい せんたん
君に聞く幾歲 仙丹を鍊るや

吾亦有方不甚難

まさ がた た
吾は亦た方に難きに甚えず有り

五金八石渾無用

ごきん はっせき すべ
五金 八石 渾て用うる無し

但喫霄々獨宿丸

しょうじょう がん きつ
但だ 霄々 獨り宿丸を喫す

語釈

いくさい
幾歲||幾年、何年、どのくらい。 せんたん
仙丹||仙人の鍊る仙藥。 ごきん
五金||金、銀、銅、鉄、錫。 はっせき
八石||八つの奇石。 輝て||全部、全て。 きつ
喫||食う、
飲む、吸う。 しょうじょう
霄々||霰、霰、空、遠い空、霞み。 がん
丸||丸める、丸い。

通釈

君に聞く何年仙藥を作っているや、私は正に難しさに堪えられないでいる、金銀銅鉄錫に八奇石全部用いていない、ただ霰や霰や霞を丸めて飲んでいる。

12 西行圖

さいぎようず
西行圖

皇統衰微倒太阿

こうとう すいび たいあ
皇統 衰微して太阿に倒る

見幾獨有這頭陀

いくたび
見ること 幾か獨り頭陀を這える有り

忽飛錫杖離塵土

しやくじよう
忽ち 錫杖を飛ばして塵土を離る

俄着荷衣遠愛河

にわか かい
俄に荷衣 着けて遠く河を愛でる

幾處溪山受清福

けいさん せいふく
幾處の溪山 清福を受く

千場花月入倭歌

かげつ わか
千場の花月 倭歌に入る

何妨未免風流罪

ふうりゆう
何んぞ未だ免かれざるを妨たげん 風流の罪を

自異他人學釋迦

しやか
自ら他人に異なる 釋迦に學ぶ

語釈

皇統こうとう 代々続く天子の血筋。衰微すいび 道義や勢力が衰えて弱まる。太阿たいあ 大きな家の棟。這むかえる 這う、はらばう。頭陀ずだ 僧が悩みを去る

ため托鉢してまはること。錫杖しやくじよう 僧や道士などのもつ杖。塵土じんど ちりと土、汚れた物この世、汚れた世の中。荷衣かい 隠者の衣服。清福せいふく 清らかな幸福、

精神上の幸福。倭歌わが 倭歌、和歌。風流ふうりゆう なごり、先人の遺風余流、みやびやか、花月 花と月美しい物の代表、花を照らす月、風雅。釋迦しやか 仏教

の始祖、釈迦牟尼。

通釈

代々続く天子の血筋や道義や勢力が衰えて弱まり大きな家の棟も倒れる、幾度か悩みや欲望を去る托鉢行脚を迎えた、直ちに行脚僧の持つ鈴のついた杖で汚れた世の中を払う、急に粗末な衣服を着て遠く河を愛でる、何カ所かの溪谷や山の美しく清らかな幸福を味合う、多くの場所で美しい自然「花と月」を愛で倭歌めやまじうたを詠む、どうしようもまだ風流をたしなむ罪を免れることはできない、自然に他人と違うことはお釈迦様に教わろう。

13 書懷四首

しよかい
書懷四首

富如倚頓終黃土

いどん
倚頓の如く富むも終に黃土

貴至帝王亦古邱

とうてい
帝王に至る貴しも亦た古邱

浮生百年草頭露

ふぜ
浮生 百年 草頭の露

與赤松子我君游

あそ
赤松子我れ君と與に游ばん

語釈

いどん
倚頓||戦国時代の大金持ちの名。黄土||黄色の土、大地、墓、冥土。古邱||古い陵墓。浮生||儂い人生。草頭||草の頭、草の上。赤松子||
太古の仙人の名。

通釈

いどん
倚頓のような大金持ちでも冥土に行けばただの黄土である、帝王の位に就くような貴人でもまた古い丘陵の墓の中、百年の人生も儂く草の上の露のようである、太古の仙人赤松子よ私と共に遊ぼうではないか。

卅年蓬掖若懸鶉

さんじゅうねん
卅年 蓬掖 懸鶉の若し

今日脱來蓑笠新

今日 脱ぎ來たりて蓑笠 新なり
すいりゅう あらた

郷里少年休問字

郷里の少年 休いて字を問う
きょうり いこ

身成錦水釣魚人

身 成る錦水 釣魚の人に
きんすい ちようぎよ

語釈

ほうふき 蓬掖||蓬を編んで作った小門。けんしゅん 懸鶉||鶉の尾のように切れてみすばらしく懸かつてる。すいりゅう 蓑笠||蓑と笠。きんすい 錦水||錦川の水。ちようぎよ 釣魚||魚釣り。

通釈

さんじゅうねん 卅年 蓬を編んでつくった小門に鶉の尾のように切れてみすばらしく懸けて、今日は脱いで來ただから

新しい蓑笠である、郷里の少年が親しく字を問う、成長立身して錦川で魚釣りをする人に。

沈黙翛然友造化

沈黙 翛然 造化を友とし
ちんもく しようぜん ぞうか

世間百事杜門謝

世間 百事 門を杜で謝す
ひやくじ ふさい しゃ

上天何意生狂生

上天 何んの意ぞ狂生を生ず
きようせい

笑問彼蒼彼亦啞

笑って彼蒼に問う彼れ亦た啞
そう あ

語釈

沈黙ちんもく＝黙る、静かに黙る。脩然しゅうぜん＝早いさま、物事らわれないさま。杜門ともん＝門を閉じる、門を塞ぐ。謝しゃ＝あやまる、ことわる、さる。狂生きやうせい＝

＝一つのことに取り付かれる、詩狂。蒼そう＝青い、青く。唾あ＝唾、ああ、驚きの声、鳥の鳴声。

通釈

静かに黙って物事にとらわれないで自然の道理を友として、世間の諸々のことに門を閉ざして断り、天の神何の意か詩狂を生む、笑ってあの人に問うもあの人もまた何も云わない

青山緑水是吾師

青山せいざん 緑水りよくすい 是れ吾が師

鉛汞有機君勿疑

鉛汞えんこう 機き 有れど君 疑うこと勿れなか

道德五千亦糟粕

道德 五千 亦た糟粕そうはく

本來面目有誰知

本來の面目ほんらい めんもく 誰か有りて知らん

語釈

青山せいざん＝青い山、男子至る所青山在り、何処でも死に場所がある。鉛汞えんこう＝鉛や水銀。糟粕そうはく＝糟、もろみ、濁り酒、酒をしぼった粕。面目めんもく＝其の人に与えられた世間の評価、メンツ。本來ほんらい＝生まれた時から、生まれつき、もとから。

通釈

青山も草木や川もみな吾が師である、鉛や水銀も生活機能をもつ君疑うなよ、人のふみ行うべき正しい道

も五千年も経てまた酒を絞った糟のよう、もとからの道理やメンツは誰にて知らされるのか。

14 乙卯秋、予得一梧桐 乙卯の秋 予一梧桐得る 大きさ一圍 手製の一琴

大一圍 手製一琴 係以詩五首 節三 詩五首を以て係はり 節三

好奇好古一迂翁

奇を好み古を好む一迂翁

齷齪十年窮更窮

齷齪 十年 窮 更に窮す

自笑千金購兵世

自ら笑う千金 世に兵を購うを

典衣買得嵯陽桐

典衣 買得たり嵯陽の桐

語釈

乙卯 安政二年、一八五五。梧桐 青桐、琴の材料。一圍 一抱え。一琴 一つの琴。奇 珍しい、變っている、不思議。一迂翁 一人の疎い老人、変わり者の老人。齷齪 あくせく、仕事をする事に拘り、十分世にな休養も取らないさま。窮 困窮、貧しくなる。自笑 自ら笑う。千金 千両、多額のお金に譬えられる。購 買う。典衣 衣類を質入れる。嵯陽の桐 連なり続く山の陽あたりの桐。

通釈

安政二年の秋私は、一本の梧桐を購入した大きさは一抱えもあろうか、それで手製の琴を作った、それに

係わる詩を五首その節三奇を好み更に古趣味の迂った翁がいる、あくせくとして十年苦勞をしたが更に貧しさは加わるばかりである、自笑する多額の金で世間では兵を購うのに、この人は衣類を質入れし

て桐の木を買い求めたのである。

一從鄭衛競淫風

ひと たび 鄭衛に從えりて淫風を競う

廉恥貞操遂日空

れんち ていそう 日を遂つて空しくす

初信古人手段好

初めて古人に信せる手段を好し

名教寄在五絃中

名を寄せ教めて五絃の中に在り

語釈

鄭衛ていゐ 春秋時代の國名。淫風いんふう 淫らな風俗風習。廉恥れんち 心が清らかで恥じるべきことを知っている。貞操ていさう 正しい操、婦人が性的關係の純

血を保持すること」古人こじん 昔の人。五絃ごげん 琴。

通釈

春秋時代の國鄭衛では淫らな音楽が流行した人々はその風俗習慣を競った、心が清らかで正し

い操も日をおって失われていく、始めて昔の人の行った方法が好ましい、名を集めて教える琴のなかにあり。

一曲南薰彈未央

一曲 南薰 彈だんずること央なかばとせず

薰風忽覺起幽篁

薰風 忽くんぷうち覺ゆうこうゆ幽篁ゆうこうを起すを

孔門琴瑟聲長絶

孔門 琴瑟きんしつ聲せい長ちよう絶ぜつす

千古無多點也狂

千古 多せんこき點てんなり狂い無し

語釈

南薰なんくん 穩なんやかな初夏の風。彈だんず 彈くく、彈くず。薰風くんぷう 薰る五月の風。幽篁ゆうこう 幽かに茂った竹藪。孔門こうもん 孔子の門下生、十哲、孔子の門、学舎。琴瑟きんしつ 琴と大琴。千古せんこ おおむかし、永遠。點てん ぼち、ほし、てん、黒いぼち。

通釈

穩やかな初夏の風を受けて一曲琴を弾くこと尽きない、薰る五月の風が忽ち幽かに茂った竹藪をそよぐのを覚える、孔子の学舎での琴と大琴を弾く音も長らく絶えてしまった、千年もの昔から多き点で狂いは無い。

15 髑髏杯行

どくろ はいこう
髑髏杯行

有醫住在平陵邊

じゅ いや へいりょう ほと
住するに醫するは平陵の邊りに在り

五龍山人往宿焉

ごりゆうさん いずく
五龍山人 往きて宿るは焉ぞ

殺鷄勸酒花深処

すず
鷄 殺し酒を勸め花深き処

主人吟詩妻撫絃

げん ぶ
主人 詩を吟じ妻は絃を撫す

吟声琴語頻聒々

しき かつかつ
吟ず声琴の語り頻りに聒々

酒闌燭出霄繼日

しよく
酒 闌にして燭 出でて霄の日に繼ぐ

滿坐之客渾蹙額

まんざ すべ ひたい しゆく
滿坐の客 渾て額を蹙す

主人急呼髑髏杯

どくろ はい
主人 急に呼ぶ髑髏の杯

道我製之備豪飲

ごういん そな
我に道う之を製りて豪飲に備う

本是某人刑餘骨

けいよ
本に是れ某人 刑餘の骨

五龍歸來語江君

ごりゆう
五龍 歸りて來り江君に語る

々々復是為余說

こうくん ま よせつ
江君 復た是れ余說を為す

欲擬玉山作一篇

才已驚劣奈詩拙

一朝遘病臥春風

骷髏語我一夢中

嗟乎君病如不起

忽作骷髏與我同

碌々義理且休講

人間居諸去忽々

不如髑髏杯裡酒

酖醕昏昏終其躬

潜也棹頭呼否々

君子翫物類目有

忍渴唯為喚盜泉

還車本因名勝母

玉山ぎょくさんに擬ぎさんと欲ほつして一篇いっぺんを作なす

才さいは己おのれに驚おど劣れつにして奈いかんせん詩し 拙せつなり

一朝いちやう 病びやう 遘あひて春風しゅんぷうに臥がす

骷髏てんろう 我われに語かたる一夢いちむ中

嗟乎ああ 君きみ 病びやう 起おきずが如ごとし

忽たちち骷髏てんろうを作つくして我われと同じく

碌々ろくろくの義理ぎり 且またに休講きこうとす

人間にんげん 居諸こしよ 去さること忽々しゅしゅなり

如ごとかず髑髏どくろ 杯裡はいりの酒

酖醕しゅんとう 昏昏こんこん 其そのの躬みを終おえる

潜ひそんで也またた棹頭しやうとうを呼よべども否々ひひ

君子くんし 翫物がんぶつ 類目るいもく 有あり

渴かつを忍しのび唯ただだ盜泉とうせんを喚よぶを為なす

車かえを還かへしては本勝母ほんしょうぼの名なずけるに因よる

あによ
りくみん
豈能く酒を盛り戮民の頭

我を汚す皓々こうこう 察々の口さつさつ くち

髑髏杯どうりはい || 髑髏どうりでつくたさかずき。
 醫者いしや || 瘡くさすくすし、
 医者。
 平陵へいりやう || 春秋前漢の昭帝の陵の名。
 邊りあた || ふち、
 へる、側
 五龍山ごりゆうざん || 漢の五帝

通釈

通釈　　体を癒す医者の住まいは五陵の辺にある、五龍山人が往きここに泊まる、鶏をしめて酒を勧める花深い処で、主人が詩を吟じ妻が琴を弾く、琴の音吟じ語る声が重なり喧しい、酒も闌となり燭も灯り宵の日に繼いで、主

人急に髑髏の杯を持ち出す、座中の客全て額を蹙めるなか、私は此の杯を作り豪飲に備える、これは本当に死刑を受けた者の骨である、五龍山人帰って来て江君に語る、江君またこのほかの説を唱える、玉山になぞらえて一篇を作ろうとしたが、才能は鈍く劣りどうしようもなく詩は拙い、ある朝病に遭って春風の中床に伏せる、骸骨は私に夢の中で私に語る、ああ君の病が治らないようなら、忽ち骸骨となって私と同じようにしなさい、僅かな義理で行う道理は休講とせよ、そして早く人間界を慌ただし去ることだ、およばず髑髏杯裡の酒には、良く熟した良い酒に酔い続けその身を終えたい、潜んでまた船頭を呼んでも拒まれる、才徳のある人は物を玩ぶのにも類目がある、渴きを堪えてただ盗泉を呼ぶ、車を帰してもとより本勝母の名ずけるによる、とは云えどうして殺された民の頭かしらに酒を盛る、私の清らかな口を汚してはならない。

16 水村晚眺四首 節一

水村晚眺四首 節一
すいそんばんちょう

秋冷茅亭晚

秋冷 茅亭の晩
しゅうれい ぼうてい くれ

白沙明水村

白沙 水村に明らかなり
はくさ すいそん

見江流不息

江を見れば流れは息わず
おし

感往事無痕

往事に痕無を感じ
おうじ こんむ

立鷺殊清潔

立つ鷺は殊さら清潔にして
さぎ こと せいけつ

潜魚向濁渾

潜む魚は濁渾に向う
だくこん

因作魚鰕伴

因て魚鰕の伴を作し
よつ ぎやか とも な

半日脱塵煩

半日 塵煩を脱す
はんじつ じんはん

語釈

水村 川辺の村。 晚眺 晩に眺める、夜眺める。 茅亭 茅葺きの家、小屋。 白沙 砂、白い砂、東澤瀉の号。 江 川、河。 息わず 休ま

ず。 往事 昔のこと、過ぎ去ったこと。 痕 痕、あと、形跡。 清潔 綺麗にして有るさま、誤魔化しがなく信頼出来る人。 潜む 隠れる、潜る。 濁渾 濁りの激しい処。 因て 原因、もと、わけ、理由。 魚鰕 魚やえび。 塵煩 世間の煩わしさ。

通釈

秋冷えのする茅葺きの家の夕暮れ、白砂の水辺の村は明るい、川を眺めれば滾々と休み無く流れる、過ぎ去ったことは跡形もないようだ、川に立つ鷺は白く清潔である、川底に潜む魚は濁りの激しい処に向かう、そして魚や蝦えびを取ったりして、半日の遊びで世間の煩わしさを忘れさせてくれた。

1/7 秋夕

しゅうゆう

涼颼 一陣葛衣清

りょうし いちじん かつい 清し

秋至衡門草虫聲

こうもん 秋は衡門に至りて草虫の聲

浴罷涼棚抱膝坐

りようぼう 浴びて涼棚に罷み膝を抱えて坐せば

如鎌新月截雲行

かま しんげつ うんこう 鎌の如き新月 雲行を截つ

語釈

涼颼りょうし 涼しい風、早い風、一陣風や雨などがひとしきり降ること。葛衣かつい 葛の繊維で織った衣服、粗末な衣服。衡門こうもん 冠木門、粗

末な家、隠者の家。草虫そうちゅう 草の中にいる虫、鈴虫、こころぎ、の類。涼棚りようぼう 涼、み棚涼み台。罷む 休む。鎌かま 稲や草を刈る道具。新月陰曆しんげつで其の月

の第一日の月「東の空に昇ったばかりの月」雲行を截る 雲行きを切る。

通釈 ひとしきり吹く涼しい風の葛で織った粗末な着物も清々しい、秋は粗末な家にも草虫の声が聞こえてくる、

一浴びして涼み台に休み膝を抱えて座れば、鎌のような月が東の空に雲の流れを切って上り始めた。

18 螢入書室

螢書室入るしよしつ

攤卷溪上月上初

卷を攤けば溪上月上り初めかん ひら けいじょう

流螢何意入吾廬

流螢 何の意ぞ吾廬に入るりゅうけい わが ろ

赤貧未到聚螢火

赤貧に螢火 聚を到らずせきひん けいか あつ

十載孤燈夜讀書

十載 孤燈で夜る書を読むじゅうさい ことう じや

語釈

書室しよしつ 書を読んでる部屋。卷まき 書物、書き物。攤ひらき 書を開く、広げる。溪上けいじょう 溪谷に上、谷川の上。流螢りゅうけい 流れ螢、迷い螢。廬ろ 家、

粗末な家草庵、庵。赤貧せきひん 極めて貧しいこと貧乏のさま。螢火けいか 螢を集めた火。聚あつめる 集める、集まる、集まり。十載じゅうさい 十年、十歳。孤燈ことう 寂し

く照らす、唯一の灯火。

通釈 書物を開いて読んでいるといつの間にか谷の上には月が上り始めていた、迷い螢何のつもりか私の家に迷

い込んだ、極めて貧しく消え残りの埋火うすみびさえ集められない、寂しく照らす灯りで十年も書を読んで居る。

19 若水翁宰由宇、

じやくすいおう ゆう さい
若水翁由宇に宰す、

其室使小奴守旧廬奴鼓綿

こやつかきゆうろ
其室小奴旧廬を守り使う、奴綿弓を鼓業と為す、

廬後有一弓為業小屋

ろ
廬後に一小屋有り余近く借り而て寓す、

余近借而寓焉一日聞

めんきゆう こえ
一日綿弓の聲を聞く、

綿弓聲有感而賦

ふ
感有り而て賦

寒威凜々膚欲裂

かんいりんりん はだ さ ほつ
寒威凜々として膚を裂かんと欲す

霜鐘鼓残梅梢月

そうしょう こざん ばいしょう
霜鐘 鼓残 梅梢の月

起向残燈讀陳篇

さんとう ちんぺん
起きて残燈に向いて陳篇を讀めば

忽聞綿弓一聲發

めんきゆう せい
忽ち綿弓一聲發すを聞く

一聲二聲似呼貧

せい せいひん
一聲二聲貧を呼ぶに似たり、

「貧、國音與綿弓聲

ひん めんきゆう こえ
貧、國音と綿弓と聲に

似、故諺云、貧々々

いこいわび ひん
似たる、故諺に云う、貧々々

鼓綿弓者貧」

三聲四聲々不絶

貧々々々又貧々

似嘲貧生貧到骨

嗟吾一貧二十年

囊中也無半文錢

容膝毎々就人借

都家今番來寓焉

鵲巢維居鳩雖拙

往々絶穀吾亦仙

人云窮貧或可療

貧餐吾甘藜兼藿

富若可求吾亦求

只恐被他窮鬼笑

鼓つ綿弓は貧う めんきゅう ひん

三聲 四聲 聲 絶えずせい せい こえ た

貧々 々々 又た貧々ひん ひん ひん

嘲るに似る貧貧を生じて骨に到るあざけ ひん ひん こつ いた

嗟 吾 一たび貧して二十年あゝ われ ひん

囊中 にも也た半文錢も無しのうちゅう ま はんもんせん

膝を容し毎々 人に借りるを就すひざ よう まいまい ひとにかりるを じゆす

都家に今 番として來たりて 焉ぞに寓すとけ ばん いずくん

鵲巢 維居鳩 拙たりと 雖しやくそう いきよきゅう せつ いえども

往々 穀を絶えて吾れ亦た仙さうさうた こく ま せん

人 云う貧に窮して或は療す可しとひと いう へん にきゆうして あるいは りょうす べ

貧餐 吾れ藜と藿とに甘くひんさん われ れい かく

富 若し求む可く吾れ亦た求むふ べ

只だ恐る他の窮鬼に笑わただ におそる ほかの きゆうき には ころを

萬事宜可任彼蒼
人世恰似傀儡場
成者忽敗榮者枯
昔日滄海今生桑
君看百年駒過隙
無常迅速來相迫
富累巨万如陶朱
唯餘青山一片石
不如千篇富詩文
千載之下侍子雲
腐儒麤糲自古爾
詩人窮貧今如此
何須戚々鳴不平
只當欣々過此生

萬事 宜く彼蒼に任す可し
人世 恰も似たり傀儡場に
成者 忽ち敗れて榮者は枯れる
昔日の滄海 今 桑 生る
君 百年 駒隙を過ぎを見る
無常に迅速 來り相 迫る
富むは巨万に累して陶朱の如し
唯だ餘す青山 一片の石
如かず千篇の詩文に富むを
千載 之れ下るは侍子の雲
腐儒 麤糲 古より爾り
詩人 貧に窮するは今 此の如し
何んぞ須からく戚々と鳴くこと平らかならず
只だ當に欣々として此の生を過ぎる

前程不遠急々辨

前程 遠からず急々の辨

居諸易移事難成

居諸 移り易く事 成り難し

攬卷頻挑燈下讀

卷を攬りて頻りと燈下に挑げて讀む

猶聽貧々々々聲

猶お貧々々々々の聲を聽く

語釈

若水翁じやくすいおう 都志見若水、由宇ゆうの代官。由宇ゆう 山口県山陽本線駅辺り。宰さい 司る、切り盛りする、治める、宰領。小奴せうに 小僧、下男。廬ろ 家、

小屋、庵。旧廬きゅうろ 旧宅古い家、小屋、庵。鼓こ 太鼓叩く。綿弓めんきゆう 糸を紡ぐ道具。賦ふ わりあて、ぶやくねんぐ、述べる、詩歌を作る、詩歌をうたう、

心に感じたことをありのままにうたうもの。寒威かんい 寒さの威力、寒さが厳しい。凜々りんりん 恐れ慎むさま、寒いさま、勇気の盛んなさま、凜々しいさま

膚ひ 皮膚。裂れつ 裂ける、皸ひび、皸あかぎれ。霜鐘そうしよう 寒々とした鐘の音、鼓「叩くつく。残梅ざんばい 散り残りの梅の花。殘燈ざんとう 残り火、灯心の、残り。陳篇ちんぺん 書物

を広げる、並べる。嘲ちよう 嘲る。生貧せいひん 生れながらの貧乏。貧到ひんいた 貧しさに到る。囊中のうちゆう 袋の中、財布の中。半文錢はんもんせん 一文の半分の錢。膝ひざ 膝を容し 膝

を正し、正座、改まって、膝を抱える。毎々まいまい いつも、る、たびたび。就借しうしやく 借りる。寓いう 仮住まいする、身を寄せる。鵲巢しやくたう カササギの巢。維居鳩いききゆう

鳩は自分で巢を作れずカササギの巢に住むの意、他人の地位を横取りすること。拙いせつ 拙い、下手。雖いへども 元々虫の名、いへども、けれども如し、助

字。貧餐ひんさん 貧しい夕食。穀こく 穀物、五穀。窮貧きゆうひん 極貧。療可りようか 治療でが出来る。藜藿れいかく 藜あかぎ、藿まめ、豆の葉、を混ぜた粗食のこと。窮鬼きゆうき 貧乏神。

萬事ばんじ 全てのこと、色々のこと。蒼髑髏そうどくろ 操り人形、木偶の棒。成者せいじや 成功した人、栄者、富み栄る者。恰あた、恰こう、丁度、ピッタリ。忽こつ 忽ち、一

瞬の間に、直ちに。昔日せきじつ 昔、以前。滄海そうかい 青い海原、東海、渤海に同じ、北海中に在る仙人の住む島、漢代の郡名。桑生そうせい 桑の木が生い茂る。駒隙くげき

日月の過ぎ去ることの早いことを云う、戸の隙間をちらりと走り過ぎる馬のように早い意、人生のはか。無常むじよう 常が無い、定めがない迅速ないこと。

超速やかに非常に早く。巨万きよばん 巨万の富、万々、一億、非常に多い数。累るい つなぐ、かさねる。陶朱たうしゆ 陶朱公春秋時代、その君主の越王を助けて呉に復

讐した後に陶に行き、商売人になり財産を作った。青山せいざん 青々と木の茂る山、男子至る所青山在り、則ち死に場所は何処にでもある。千篇せんぺん 文章が全く

同じで変化が無い、終始変化が無い、白樂天の詩千篇せんぺん一律云々。詩文しぶん詩や文章。子雲しうん漢の揚雄、文章家。千載せんざい千年、千歳、永遠に。卷くわん書物。攬らんりら開いて。腐儒ふじう腐れ儒者、役に立たない学者。麤糲それい麤、粗、あらう。糲れいくろこめ、玄米。戚々せきせき親しみあう、憂い恐れるさま心の動くさま。欣々きんけん喜び楽しむさま、嬉しそうにいきいきするさま。辨べんわける、わきまえる、明らか挑しかげ掲げる、挑いじむ。頻りにしき頻繁に、頻ひん、速やかに。燈下とうか灯火のもと。都家とけ都志見家。

通釈 若水翁由宇を宰領する、その婦人の古い家を下男が守り使う、その下男綿糸を紡ぐのを業としている、家の後ろに一つの小屋があり、私は最近借りて住まう、一日中糸を紡ぐ音をきく、感ずるところありそして詩歌を詠む。寒さの威力が厳しく膚を裂くほどである、霜の降りた冬の夜の夜明けの鐘の音と梅の梢に月が架かるころ、起きて灯心の残り火で書物を広げ読んでいると、突然綿弓「綿糸を紡ぐ道具」の一声発するを聞く、一声二声貧しさを呼ぶに似ている、貧國音と綿弓との音に似ている、故に諺ことわざに云う、貧々々鼓うつ綿弓は貧。三声四声声絶えることなく、貧々々又貧々、まるで私を嘲るようだ貧を生じて骨身にしみる、ああ私一たび貧して二十年、財布の中にまた半文銭もない、膝を正してちじこまりながら人に毎度借りている、都志見家つしみけに今は番として住む、鳩は自分で巢かたぐちを作れず鵲かたぐちの巢に棲むの意、他人の家に住む拙さである、先々穀物も絶えて私はまた仙に、人は云う貧に窮して加療をしてはと、貧しい食事に私は藜あかぎと藿かく「豆の葉」を混ぜた粗末な食事も甘んじている、富は求むべく私も求める、ただ恐れる他の疫病神や借金取りに笑われることを、全ての事宜しく自然にに任せる、人の一生はちやうど

操り人形の場のようなのである、成功した人も忽ち落ちぶれ富み栄えた人も枯れ果てる、栄枯盛衰人の世の常という、昔 蒼い海原であった処に今桑の木が生い茂っているのは一つの真理である、君百年の月日の過ぎ去ることの速い事を看る、人生の儚いことは非常に速く来て迫る、巨万の富は累々と重なり春秋時代の陶朱公ののように、ただ私は青山の一欠片の石となるだけだから、巨万の富を重ねるよりも千篇の詩文を富ます方が第一かと思われる、千年も下れば子雲しん「漢の揚雄、文章家」に侍る、つまりぬ学者の粗食は昔よりそうである、詩人が窮乏するのは今に始まったことではない、どうして今更末練がましく不平を鳴らすべきや、ただ本当に喜び楽しみこの一生を送るべきであり、前途ほど遠くなく急いで明らかにする、諸居は移し易いが事は成り難い、書物を開いて燈火に掲げて頻りに読む、それでも尚聞く貧しき者の綿弓を挽く貧々々々の声を。

20
由宇八景

ゆう はっけい
由宇八景、

都若水囑、若水時宰由宇都

都若水に嘯み、
若水時に由宇を宰領

あ
千載橋

せんざいばし
千載橋

落月逼溪樹

らくげつ
落月
けいじゅ
溪樹に
せま
逼り

寒流繞野塘

寒流 かんりゅう
野塘を繞る やとう めぐる

柳梢人語響

柳梢　　りゆうしょう
人語の響き　じんご　ひび

人度板橋霜人

板橋の霜を人は度るわた

語釈

由^{ゆう}字^じ＝山口県由^{ゆう}字^じ町。都志見資藏号を若水、由^{ゆう}字^じの代官。宰領^{さいりやう}＝治める。千載^{せんざい}橋^{はし}＝千年橋、千歳橋、永久橋。落月^{らくげつ}＝入りかかった月、西に

傾いた月。
 溪樹けいじゆ 溪谷の木。
 逼ひよく 迫る、
 近づく狭まる。

寒流かんりゅう＝寒々とした流れ、物寂しい流れ。野塘やとう＝野の堤、土手、池、ため池。繞じょう＝「まとう、

まとわる、めぐる、めぐりゆく。
 柳梢りゅうしょう || 柳の梢。
 人語じんご || 人間の言葉、話し声。

通釈 西に傾いた月が溪谷の樹木に迫っている、寒々とした流れは野の堤をめぐる、柳の梢に人の語らう声が響

く、人は渡る板橋の霜の上を。

い 新港

しんみなと
新港

今日 恰順風

今日 恰も順風なり
あた じゅんふう

解纜港中 舶

解を解き港中に舶す
ともすな ほじ はく

忽入前嶼間

忽ち前嶼 間に入る
ぜんしよ

布帆 數點 白

布帆 數點 白し
ふほん すうてん

語釈

新港 山口県岩国市、潜水の佐久間艇長以下の殉難の所。恰も 丁度。順風 追い風。解を解き 艦綱で船を係留を解く。泊船 停、

泊まる。嶼 島。小 小さな島。布帆 帆船の帆の布。數點 幾つか小さく見える。

通釈

今日 ちょうど順風である、艦綱を解き新港の中で停泊する、直ぐ前の島嶼の間に入る、数隻の帆船点のよ

う
慈雲院

慈雲院

楓樹寒烟鎖

ふうじゆ
楓樹
かんえん
寒烟を鎖すあり
とぎ

蕭條古寺秋

蕭條として古寺の秋

疎鐘聲陰々

疎鐘そしょう　聲陰々いんいんたり

遥出夕陽樓

遥かなる夕陽の樓を出ずる
ゆうよう ろう

語釈

慈雲院じんいん 寺の名。楓樹ふうじゆ 楓かえでの木。烟えん けむり、鎖さ 鎖くさり、閉ふさす。蕭條しょうじやう ひとつそりと物寂しい。夕陽ゆうじやう 夕日、夕陽。樓ろう たかどの、二階

建ての建物、ここでは寺の楼閣、鐘楼。

通釈

楓の樹木が寒々と煙る靄を閉ざすようだ、ひっそりと物寂しい古寺の秋を、疎らに撞く鐘の音も寂しく聞

こえる、遙かに在る楼より夕陽が出る。

え 長野瀑布

ながの ばくふ
長野の瀑布

路入深林去

しんりん
路は深林に入りて去り

瀑懸溪窮處

ばく けいきゅう しか
瀑は溪窮に懸る處

白雪飄半空

はくせつ はんくう ひるがえ
白雪 半空に飄る

六月不知暑

六月 暑さを知らず

語釈

ながの
長野＝山口県岩国市郊外。ばくふ
瀑布＝滝。けいきゅう
溪窮に懸る處＝谷の終わる所に懸崖のように。くう
空に飄る＝空にふわふわと漂う。

通釈

道は森林に入って途絶えた、滝は溪谷の奥尽きる処に懸かる、白雪空の半ばに瓢として翻る、六月と云う

のに暑さ知らずである。

お 西嶽孤松

せいけん こしろう
西嶽の孤松

日夕焚香坐

にちゆう
日夕香を焚いて坐し

閑吟對酒缸

かんぎん
閑吟 酒缸に對す

前山老松秀

ぜんさん
前山 老松 秀ず

寒色落幽窓

かんしよく
寒色 幽窓に落つ

語釈

西嶽さいかく 西の嶮しい山、形が甑こしに似た嶮しい山、みね。孤松こしう 一本松、一本ぼつんと生えてる松。日夕にちゆう 昼間から夕方にかけて、毎日。閑吟かんぎん

長閑に吟じる。酒缸しゅこう 酒を入れる素焼きの瓶、縦型のもの。老松らうしう 老いた松、年数の経た松。秀しゅう 秀でる、優れる。寒色かんしよく 寒々としたさま。幽窓ゆうそう

幽かな寂しい窓、部屋。

通釈 昼から夕べにかけて香を焚いて座し、長閑に吟じ酒の瓶に對し酌む、前ぜんの山の老松秀しゅうでて見事である、寒々

としたさまは幽かな寂しい窓辺に落ちていく。

か 嶋端

はしま
端島

海村暮色暗

海村 暮色暗く
かいそん ぼしよく

枯荻戦秋風

枯荻 秋風に戦く
こてき しゅうふう おのの

遠嶼夕陽在

遠嶼 夕陽在り
えんしょ ゆうひ

迤邐十里紅

迤邐十里 紅なり
いり じゅうりくれない

語釈

端嶋はげま 山口県岩国市の沖合の嶋。 海村かいそん 漁村、海辺の村。 暮色ぼしよく 夕暮れ、夕方。 枯荻こてき 枯れた荻。 秋風しゅうふう 秋の風。 嶼しょ 嶋、小島。 夕陽ゆうひ 夕暮れの太陽。 迤邐いり 連なり続くさま。 十里じゅうり 約四十キロ、遠くの意。 紅くれなゐ 紅色、赤い。

通釈

海辺の村の夕暮れは暗く、枯れた荻が秋風に吹かれて震えている、夕陽は遠く島嶼の辺に在る、夕陽に紅に染まり遠く連なり続く。

き 梟谷螢火

梟谷螢火
ふこくけいか

雨餘螢火滿

雨餘 螢火滿ち
うよ けいか

熠々照三更

熠々三更を照らす
ゆうゆうさんこう

行人何須燭

行人何んぞ燭を須いず
こうじん しよくもち

溪村一路明

溪村一路明らかなり
けいそん いちろう

語釈

晷ふ鴨、水鳥。螢火けおか螢火。熠々ゆうゆう光の鮮やかなさま。三更さんこう夜を五つに分けた第三の時刻。今の午後十二時の前後二時間ほど。行人こうじん行人。旅人。何んぞいんぐひとどうして。燭を須いずてしく明かり、灯火、手燭を用いないのか。溪村けいそん谷治いの村。一路いちろう一筋の道。

通釈

雨が上がり螢火が満々みちみちている、鮮やかな光は午後十二時前後まで照らす、道行く人は何の灯りも要ら、溪

谷治いの村の道は明るい。

く 大將軍

大將軍
だいしょうぐん

不知是何神

是れ何の神かを知らず

山巔一廟古

山巔 一廟古く
さんてん びよう

山後俄生雲

山後さんご 俄にわかに雲を生じ

山前驟降雨

山前さんぜん 降雨くわうう 驟しゅうせる

語釈

大將軍だいていよんじん 大將軍山だいていよんじん、山口県由宇町。巔てん 頂てんき、山の頂上。廟びやう 御靈屋みたまや、社やしろ、祠ほたる。俄が 俄にわか、急いそに。降雨くわうう 雨うが降る。驟しゅうせる 馳ちせる、
俄雨、突然の雨。

通釈

これは何の神か知らない、山の頂に古い祠がある、山の後急に雲が出て来て、山の前では雨が降り駆け抜ける。

21 見鑄西洋大砲有作

鑄いものの西洋大砲を作る有るを見る

纔築長城秦便亡

纔わずかに長城ちやうじやうを築きずいて秦しん便すなわち亡ほろび

從來大禍在蕭牆

從來たいかの大禍しやうしやう蕭牆しやうしやうに在り

應為清時少鰥寡

應まさに清時しんじに為す少鰥寡かんか

千金銷盡學西洋

千金せんきんを銷とくし盡つくし西洋に學ぶ

語釈

鑄いもの 鑄いもの 金屬を溶かし鑄型にいれる。纔わずか 纔わずか 少少し。長城ちやうじやう 万里の長城。秦しん 戦国時代の七雄の一つ、「周代の後始皇帝のとき天下を統一

した」從來じゅうらい 是まで、元から。大禍たいか 大きな禍、大乱。蕭牆しやうしやう 門の内側、内側から起こるもめ事、内輪もめ。清時しんじ 清王朝、名ツングース族の愛新

覺羅族が東北、満州から起こり建国した、其の時代。鰥寡かんか 妻のない夫、夫のない妻。千金せんきん 千両、沢山のお金。銷盡しょうじん 溶かし尽くす、溶かし失う。

通釈 僅かに長城を築いて秦國は即ち亡びた、これまでの大きな禍は内側から起こるもめ事である、当に清國の

時に幼い妻の亡い夫や夫の亡い妻を作った、莫大な金を溶かし尽くして西洋に学ぶのか。

22 失題

丙臘月廿一日、余夢與午谷翁會一所、余得雨暗窗燭有淚之句、不已、蓋翁下世已五年矣、余與翁為詩酒之游、率無虛日、今則貧困益甚、織紵緯蕭、不能復如昔日、今昔之感曷已乃賦三絕句、首二章、冠以夢中所得句、後一章不復用前体

へいろうげつにじゅういちにち
丙臘月廿一日 余夢で午谷翁共に一所で會す、余雨暗し窗に燭淚有り之句を得る、翁激賞已ならず、
けだし かせい
蓋翁下世已に五年なり、余共に翁詩酒之游を為す、率虚日無し今則ち貧困益甚なり、織紵、昔日の
かつ
如く復す能はず、今昔之感ず曷已に乃三絶句を賦す、首の二章、冠は夢中で句を得る所以て、後の
はじめ
一章は前の体を用いず。

語釈
丙臘月へいろうげつ安政三年十二月、一八五六。午谷翁ごんくわう香川午谷、南部五竹の詩の先生。窗そう窗、窓。燭しよく明かり、灯火、手燭、蠟燭。激賞げきしょう大變にほめる、非常にほめる。蓋けだし思うに、これ、むしろ、なんぞ、反語の助字。下世かせい死ぬ、後世、下界。詩酒ししゅ詩を作り、詠い、酒を飲む。游ゆう遊ぶ。率りつおおむね、わりあい、したがう、もちいる。虚日きじつ虚しい日。貧困ひんこん貧乏で困る。益ます益々。甚じん甚だしい。織紵しよくくくつ飾りのついた織物。緯蕭いしやう雨の漏る家、あばら屋。緯蕭いしやうよもぎの織維で、横糸織りのもの、粗末な衣類。昔日せきじつ昔の日々。曷かつまとめる、こいねがう、いのる冠かんかん漏屋ろうおく雨の漏る家、あばら屋。緯蕭いしやうよもぎの織維で、横糸織りのもの、粗末な衣類。昔日せきじつ昔の日々。曷かつまとめる、こいねがう、いのる冠かんかん

むり、かしら。夢中むちゅうし夢の中、物事に熱中して吾を忘れるさま。

通釈 安政三年の十二月二十一日の、五竹は夢を見た、午谷翁と一緒に会している、そこで五竹は雨暗く寒窓燭

涙あるの句を得た、ところが翁はこれをいたく激賞してくれた、翁は既に亡くなり五年も経る、嘗て五竹は翁と詩酒の遊びをして常に翁の元で生活をしたもので有った、今は貧しさが激しくて着る衣服も昔日のようなものでは無かった、今昔の感を得たので三絶句を賦した。その始めの二章、冠は夢の中で得たところの句を聞いたが後の一章は前の体を用いなかった。

雨暗寒窓燭有涙

雨暗く寒窓かんそう 燭あかりに涙有り

夢醒枕上忽無君

夢醒さめて枕上ちんじょう 忽ち君無し

惆悵十年一夢後

惆悵ちゆうちやうすること十年一夢のちの後

猶來夢裡細論文

猶夢裡なおもむりに來りて細く文ぶんを論ず

雨暗寒窓燭有涙

雨暗く寒窓かんそう 燭あかりに涙有り

衾冷漏屋獨成眠

衾ふすまひ冷ややかにて漏屋ろうおく獨り眠りを成さす

君是悠々長夜客

君是れ悠々 長夜の客

耽文應勝似當年

文に耽り應に勝るは年に當似てす

塵事營々斜日斜

塵事營々日斜に到る

胸中雪月不存些

胸中 雪月些か存せず

恠吾半夜寒窓夢

恠吾半夜に寒窓の夢

猶落草溪第一家

猶落る草溪第一の家

語釈

惆悵ちやうちやう 恨み嘆くさま、失意のさま、憂い悲しむさま。衾きん ぶすま、よぎ、ねまき、夜具、きようかたびら、死体に着せる衣服。悠々ゆうゆう 憂

えるさま、遠く遙かなさ暇のあるさま、のんびりとしたさま。長夜ちやうや 秋の夜長。耽たん 耳が垂れ下がるさま、耽る、度を越して楽しむさま。勝應しょうおう 直

ぐ対応する。塵事じんじ 世の中の煩わしいこと。營々えいえい 激しく往来するさま、あくせくして利を求めるさま。日斜にっしや 日が西に傾く夕方。胸中きようちゆう 胸の中、

心中。雪月せつげつ 雪や月、年月。些さ いささか、わずか、すこし。草溪そうけい 草の生い茂る谷。恠がい 小さな疑い。

通釈

1 雨降りて暗い寒々と寂しい窓辺の灯りあり涙する、夢が醒めて君はもう枕元にはいない、失意のまま十

年一夢の後、尚夢の中に出て来て細かく文をを論じる。

2 雨降りて暗い寒々と寂しい窓辺の灯に涙する、夜具も冷ややかにあばら屋に独り眠っている、君これ遠

く遙かに長い旅路の客として眠りにつくのみ、文に耽るは当年以上のものである。

3世の中の煩わしくあくせくして利をもとめ日は斜めに傾いた、胸中には雪や月の美しさは微塵もない、私は夜中に寒々と寂しい窓辺で見た夢に疑いをもつ、尚落ちる草深い溪谷沿いの第一の家であることよ。

23 春日偶成

しゅんじつぐうせい
春日偶成

會心何必濮兼壕

かいしん ぼく とう
會心何んぞ必しも濮と壕と

樹密溪園鳥語高

じゅ けいえん みつ ちょうご
樹は溪園に密にして鳥語高し

窓外林泉坐似壁

りんせん いざり
窓外の林泉に坐すこと壁に似たり

世間得失褒如聲

とくしつ ほめる せい
世間の得失褒は聲すが如し

青風拂屋門前柳

せいふう おく はら もんぜん
青風 屋を拂う門前の柳

紅雨過牆隣舍桃

しょう りんしゃ
紅雨 牆を過る隣舍の桃

利走名奔人自老

めいほん じん じらう
利走 名奔 人自ら老ゆ

無邊春色屬吾曹

むへん しゅんしよくわ そう ぞく
無邊の 春色 吾が曹に屬

語釈

會心かいしん 心の中でさとり、心になう。濮ぼく 濮水、河南省を發す川の名、濮上の音亡国の音楽。壕とう 堀。樹密じゅみつ 密林、木が密。林泉りんせん 林の中

のに茂る。溪園けいえん 谷治いの庭。園ちようじ 鳥語 鳥が鳴く、鳥が語る。林泉 泉、林と泉、山野の景勝、隠遁の場。坐壁ざへき いざり、あしなえ、歩けないさま。

得失とくしつ 損得。褒ほう 裾の広い衣服、ひろい、おおきい、ほめる、あつめる、周代の国名。聲せい 人の話を聞き入れない。春日しゅんじつ 春の日、春の一日。偶成ぐせい

ふと思いついて出来る、又その作品。青風せいふう 薰風、爽やかな風。屋拂おくはら 屋根をさつと風が吹く。紅雨こうう 花に注ぐ雨、赤い花の散るたとえ。牆しやう 垣根、

堀。隣舎りんしゃ 隣の家。奔ほん 奔る、勢い良く走る。無邊むへん 広くて限りがない、全世界を照らす限らない光。春色しゅんしき 春の景色、酒に酔ってほんのりと陽気になった顔。曹そう つかさ、役人、属官、なかま、周代の国名。屬ぞく すゝやから、みうち、したがう、むすぶ。

通釈 心の中で悟るなぜひずしも濃上ぼくじょうの音と壕ねを、樹木は溪谷治いの庭に茂り鳥の鳴き声も高々と、窓の外の林の泉に座ること歩けない人のようである、世の中の損得や褒める人の話を聞き入れないようである。爽やかな風が門の前の柳で屋根をさっと払うように吹く、紅い雨が垣根を超えてきたそれは隣の家の花であった、利益を追求めし名利に奔走する人は自ずから衰微していく、全世界を照らす限らない光は酒に酔ってほんのりと陽気になった顔の仲間にしたがう。